

地域連携 推進センター

ニュース

NEWS

2024
Vol. 07

Contents

- ごあいさつ・地域との連携 P1
- 学生の活動 P2
- 産学官金連携 P3~4
- 公開講座開催報告 P5~6
- 教員の活動 P7



特集
【1】 学生の活動



特集
【2】 教員の活動



地域との連携



ごあいさつ ～地域連携推進センターニュースvol.7の発行によせて～

新潟県立大学では、大学の基本理念である「地域性の重視」を追求し、地域社会に開かれた大学として、さまざまな地域連携や産官学連携の総合窓口として地域連携推進センターを設置しています。地域連携推進センターは、本学開学以来、主に三つの取り組みを行ってまいりました。まず、産官学連携をすすめるために、自治体との連携協定の締結、企業や自治会、NPO、他大学との連携事業への参画、共同研究促進のための情報の発信をしてきました。また、教員、学生の専門性を活かして、教職員と学生が一体となって地域活動を支援し、地域の課題の発見と解決、地域の活性化を目指してまいりました。さらに、県民の生涯学習の場として、公開講座などの学習の機会を提供してまいりました。

これからも、地域連携推進センターでは、地域社会のさまざまな課題の発見と解決に向けて、本学の教育・研究機能を積極的に活用し、地域と連携して実践的・協動的に取り組む、地域貢献を果たしてまいります。また、社会人等の生涯学習ニーズに対応した学習の機会を提供してまいります。これらの活動を通じて、本学の教育研究の推進、地域の皆さまとの協働、地域社会の発展に貢献できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



地域連携推進センター長 植木 信一

地域との 連携



本学は、地域に根ざした公立大学として、共に地域の課題解決に取り組むべく、新潟市を中心とする県内の自治体、学校等と連携を図っています。

新潟市・スーパーと健康栄養学科学生の協働による 食環境整備の取り組み

人間生活学部健康栄養学科 村山 伸子教授・小島 唯助教

健康栄養学科では、3年生の公衆栄養学実習の一環で、新潟市・スーパーやレストランと協働した食環境整備の取り組みを2017年度から行ってきました。新潟市民の食の課題として、食塩摂取量を減らすことや、野菜摂取量を増やすことがあります。それらの課題解決のために、市民の食育や健康への意識を高め、バランスの良い食事を手軽に食べることができるような食環境を整えることを目指して活動に取り組んできました。



2023年は新たに、新潟市食と花の推進課、イオンリテール株式会社と健康栄養学科3年生15名が連携し、お弁当開発の取り組みを行いました。開発したお弁当は、“カラフル野菜のグリルチキン弁当”と“酢鶏でいろどり中華弁当”の2種類です。10月25日～12月5日の約1か月に渡り、新潟県内のイオン・イオンスタイル・清水フードセンター36店舗で販売されました。販売に際して、11月3日にはイオン新潟青山店で販売イベントを実施し、11月4日には学生がNST「八千代コースター」に出演し、お弁当をPRしました。



今回の開発のテーマは、とくにバランスのよい食事の準備が難しいといわれる30～50歳代の働く男性をターゲットとした、スーパーで手軽に購入できるようなお弁当でした。健康的なお弁当は一般的に、薄味や物足りないといイメージされがちですが、それらを感じさせないような味付けやボリューム感、ネーミングが意識されています。お弁当のメニュー決定までには店頭で嗜好調査も行い、お客さんのニーズに沿ったお弁当を開発できるように努めました。

学生たちはお弁当開発を通して、商品化されるまでには、自分たちが提供したいメニューや使用したい食材と、栄養価や価格のバランスを調整することの大変さや、企業が量販を可能にするための手法など、商品開発のやりがいや難しさを学びました。

このように、本取り組みは、学生にとっても学内の実習だけではなく経験することができない、自治体や企業との連携の実際を学ぶ、とても貴重な機会となっています。今後も継続した取り組みによって、新潟市民のより良い食環境づくりに貢献してまいります。



▲カラフル野菜の
グリルチキン弁当

◀酢鶏で
いろどり中華弁当

G7新潟財務大臣・中央銀行総裁会議のボランティアに参加して

国際地域学研究科 橋本 小百合さん

私は2023年5月に開催されたG7新潟財務大臣・中央銀行総裁会議にボランティアとして参加しました。大規模な国際会議に携わって、雰囲気を感じたいというのと自分の語学力を活かしたいと思ったからです。



※財務省提供

4月のボランティア研修で、新潟の歴史や食文化、過去に聞かれた質問等を確認しました。この時、意外と知らないことが多いということを感じました。また、会話は基本的に英語のため、全てを英語で説明できないといけません。私は、このままでは当日、相手に迷惑をかけてしまうと感じ、会議開催まで、新潟の歴史や食文化を勉強し、それらを英語で伝えられるように繰り返しました。さらに、今回のような国際行事においては、プロトコル(国際儀礼)に則って行動しなければなりません。国際行事に携わるのは初めてだったので、このルールを体に染み込ませるのに苦労しました。

会議期間中、テロ対策という観点から、残念ながら関係者に会う機会はほとんどありませんでしたが、何回か報道関係者や観光客の方と英語で会話をすることがありました。問題なくコミュニケーションをはかることができ安心したのを覚えています。また、業



務は市や県の職員の方と一緒にいったため、現在、市や県が取り組んでいる政策について詳しく話をしてくださいました。自分が知らないだけで、行政は多くの取り組みを行っているのと知り、よい学びになりました。

今回のボランティアに申し込み時、正直、自分が携わって迷惑をかけないかとても不安な気持ちがありましたが、無事に終わって安堵していますし、よい経験になりました。そして、新潟について学んだことや、他のボランティアの方々、行政職員の方々とコミュニケーションをとる中で培った力は、後の公務員試験、面接にも役に立ったと思っています。今後も、このような機会があったら参加したいです。

「東区Eとこ探求プロジェクト (市政情報コンテンツ作製)」に参加して

国際経済学部 神藏 弘毅さん

東区Eとこ探求プロジェクトは、東区の「産業のまち東区まちづくり・ひとづくりプロジェクト」の取り組みの一つで、東区役所と東区内にある企業の魅力をPRするデジタルサイネージを、公募に応じた私と新潟大学、新潟デザイン専門学校の3人の学生が製作するという活動です。単にコンテンツを製作するというだけではなく、「サポート企業のもと、学生が疑似的な企業側として顧客のニーズを引き出し、顧客のニーズに沿ったモノを製作する」とい



う、社会における実践的な経験を学習する活動でもあります。

私はこの活動を通して、多くを学びました。サイネージを製作するために、まずPRしたい企業の選定・リサーチを行い、取材のアポ取りを行いました。ここでは、企業の選定・リサーチは難なく進められたのですが、アポ取りに四苦八苦しました。電話で企業に取材のアポを取ることは、とても貴重な経験だったと思います。

その後、取材マップ作成といくつかの研修を経て、アポが取れた企業の取材に臨みました。取材はとても緊張するものでしたが、お話を聞いているうちに「もっとあなたの企業について知りたい!」という気持ちになり、自分なりにスラスラと質問することができました。ニーズを掘り上げるためには、自分から知りたいという気持ちが大切なのだと感じました。

そして、取材をもとにサイネージを製作しました。東区の人々に何を伝えたいか・学生の伝えたいこと・企業の伝えたいこと、それぞれを上手く表現できる



ようにデザインを考えることはとても大変なことでしたが、各企業の要望をしっかりと表現できたと思っています。

この活動を通して、私は、多くの人に東区についてもっと知ってほしいと思うようになりました。また、疑似的に一企業として他企業とやり取りをさせていただいたこと・私たちのサポートをしてくれた方々にはとても感謝しています。この経験を自分のためだけでなく、別のところにも還元できるようにしていきたいです。

産学官金連携の取り組み

現在、大学には保有する教育、研究の成果を広く社会の発展のために活かしていくことが求められています。また、大学が社会の様々な主体と連携することにより、教育、研究の一層の活性化が図れるともされています。新潟県立大学では基本理念として「地域性の重視」を掲げており、新潟県内の産業、企業、行政、機関等と連携した取り組みを通じて、保有する教育・研究・成果の実装化を進めています。これらの取り組みを通じて、学生たちに社会を深く知る機会づくりも積極的におこなっています。

新潟活性化プランづくり “Excitement Niigata !”

第四北越フィナンシャルグループで「地域商社」機能を担っている株式会社ブリッジにいがたと共催で、「新潟活性化プランづくりプログラム“Excitement Niigata !”」を、2022年より本学学生を対象に実施しています。提示されたテーマに対して学生がチームで、現状分析による問題点の把握と解決策の立案を行います。本プログラムではプランの発表で終わりとするのではなく、ブリッジにいがたと本学教員がサポートして、学生たち自らが提案したプランの実現を目指します。

2023年の取り組み

4チーム10名の学生が以下のテーマに取り組みました。

- 米粉の消費拡大に向けた施策の提案
- 「温泉県」としての認知度向上と誘客施策の提案
- 教育のデータ活用

6月に最終発表会を行った後、米粉を使った「新潟焼き」を10月に開催された大学祭で販売しました。



最終発表会

提案プランの商品化

2022年プログラムで提案された新潟の名産品であるルレクチエを使った「にいがた和牛に合うタレ」が、多くの方々の支援により商品化されました。必要な資金は、クラウドファンディングで得ました。

2023年5月より、ブリッジにいがたを販売者とし、県内のスーパーやJA、イベントで販売され、8月には東京日本橋のブリッジにいがたアンテナショップでも販売され、好評を得ました。

取り組みは新聞やテレビで紹介されるとともに、11月ににいがた和牛推進協議会が開催した「にいがた和牛20周年記念式典」で開発・商品化に取り組んだ学生5名が特別講演を行いました。

2024年の取り組み

学生たちが以下のテーマに取り組みます。

- 米以外の農業産出額を高める方策の検討
- 米の消費量増加を促す方策の検討
- 新潟県の伝統工芸品の認知度向上、販路拡大施策の検討
- 新潟県各地の多様なハード・ソフト資源の利活用の検討
- 世界を相手にした新しい事業プランの検討



2024年1月18日説明会



県内企業との連携した取り組み

産官学交流会 — 新潟県におけるプラントベースフード市場の開拓の可能性を考える —

2023年11月21日に、表題の交流会が開催され、県内外から約40名の方々が参加されました。プログラム前半は、専門家による講演(NPO法人ベジプロジェクトジャパン代表理事川野陽子氏)、本学教員によるベジタリアン体験談(国際経済学部Tu Li-hsin講師)、地元企業のプラントベースフード取り組み事例の紹介(株式会社JR東日本クロスステーションフーズカンパニー十日町すこやかファクトリー梅澤嘉朗氏)、本学学生による課外活動研究の成果発表(国際経済学部Victor Gorshkovゼミ)が行われました。後半では、プラントベース商品を試食しながら、参加者全員でお米をはじめとする農作物が豊かな新潟県におけるプラントベースフード市場開拓の可能性や課題について、意見交換が行われました。



地域の課題をテーマとしたセミナーの開催

新潟県立大学では学内にある教育、研究の成果に加えて、学外の専門家の知見も合わせて、地域の課題に対して提起をおこなうセミナーを開催しています。今後も地域が抱える課題に向き合うテーマで、セミナーを開催していきます。

産学連携セミナー

「酒造りのくに、新潟 ウイスキー造りの新たな動きとその課題」

2023年11月に新潟での酒造りの新たな動きについて、新潟県と共催でセミナーを開催しました。セミナーでは本学梅野匡俊特任教授から「消費者の酒類飲用の変化と新潟の酒造り」、ウイスキー文化研究所の土屋守所長から「クラフトウイスキーの今後と課題」、近年稼働した亀田と坂町にある各蒸留所の代表である堂田浩之氏と松本匡史氏から「新潟のウイスキー造り」について講演が行われました。セミナーは会場とオンラインで開催し、県内の酒造業、地域活性化に取り組んでいる機関などと、県内外と海外からのウイスキー愛飲家も加え、100名を超える方々に参加いただきました。

参加者からは、「新潟県においてウイスキーが参入し、日本酒などとともに県全体で酒類王国という立場で発信ができると感じた」「新潟で発展可能な農業資産の活用方法などがあれば是非聞きたい」などの意見が出されました。



農業リカレント講座

「データドリブン農業のはじめ方」

文部科学省の事業に新潟県が提案し採択された「新潟県 県の主要産業を支える“コーディネーター伴走型農業リカレント教育プラットフォーム”の構築」プロジェクトに本学も参加し、その一環として2023年12月7日、14日にリカレント講座を開催しました。

7日は対面・オンライン併用で、本学地域連携推進センターの蛭子拓夫客員研究員よりデータの記録や農業者が抱える課題について、ウォーターセル株式会社執行役員の藤原拓真様より、アグリノートを使ったデータ活用の事例、J-クレジット対応について話されました。

また、青空ファーム代表の青木等様より、データ収集の必要性や耕地面積を増やしながら有機農業を続けてこられた道のり、温室効果ガス削減で三つ星ラベルを取得した取り組みなどを、動画を交えてインタビュー形式でご講演いただきました。

14日は本学国際経済学部石塚辰美教授より、「Excelを使った営農データ分析入門」について青空ファーム様よりいただいた栽培データも用いて説明しました。終盤には参加者様同士で情報を教えあう場面もあり、「データの活用や分析方法を知りたい」というご意見が参加者より多数出され、有意義な講座となりました。



県内清酒産業との取り組み

新潟は清酒県として90もの酒蔵があり、ブランドとしての「新潟清酒」も広く知られています。一方、出荷量は減少傾向にあります。本学では、新潟の主要産業である清酒産業の振興に寄与していくための取り組みを行っています。

2022年に引き続き「販売データをもとにした消費特性の分析」と「酒類エントリー層の飲酒実態の分析」をテーマに、県内の各酒蔵と共同研究をおこなっています。本学教員のデータ分析の研究成果を活かすとともに、データサイエンスを学ぶ学生も取り組みに参加することにより、学びと実践の橋渡しもおこなっています。

また、10月には新潟県醸造試験場の報告会で県内の酒蔵の方々に、本学梅野匡俊特任教授が酒類全体の動向について講演を行いました。



公開講座 開催報告

今年度の公開講座では、音楽・アート・絵本などの子ども文化を切り口に、「子どもの想像力・創造力を育む地域づくり」について、子育てにかかわる多様な人たちの交流・意見交換の場となることを目指しました。当日は、雨天にもかかわらず多数ご参加いただき、会場は活気にあふれていました。

地域の子ども文化を拓く

— 音楽・アート・絵本の現場から —

オンライン
併用の
ハイブリッド
開催

令和5年
12月3日(日)
13:30~16:30



第1部 基調講演



「子どもの創造的想像力を育む」

新潟大学大学院 教授 中島 伸子氏

想像力(イマジネーション)と創造力(クリエート)の発達について、発達心理学でわかっていることの中から重要な点について課題提供したいと思います。

想像力とは「今、ここで見たり、聞いたり、触ったりできないものを思い浮かべる能力」のことです。想像

的活動の基盤は象徴機能と言われています。象徴機能とは「何か(指示対象)を別物(シンボル=言語、記号、事物、動作)で表す心の働き」です。こうしたシンボルを使えるということは、今ここにはないものを表すことで「自由を獲得する」こととなります。想像の素材には、これまでの経験や既存の知識が必要となります。経験や既存の知識が豊富であれば、想像世界が豊かになります。

想像力は、日頃の遊びや周りの人との会話から育むことができます。本やテレビから得る情報は間接的な情報で、物事の一面を伝えることしかできません。身の回りのものや人とじっくりと五感を通して直接かかわること、その際に、自らの経験、知識をもとに思考を巡らせることが重要です。子どもが想像世界を生み出すのに必要な経験や既存の知識は子どもの中にすでにあります。それを大人がうまく引き出し、使えるように支援をする。正解を教えるのではなく、子どもに考える余地を残す。そのための具体的な良い例として「おてて絵本」があります。おてて絵本とは、新潟の絵本作家サトシンさん発案の遊びで、手を絵本に見立てて開き、思いついたことをお話ししていく遊びです。小さな子どもは思いついたことをごく短くつぶやくことが多いです。親は、子どもの述べたことを少し言い換えたり、合いの手を入れたり、うまい質問をしたりします。このようにして子どもの中からすでにイメージとしてあるものを引き出し、大人と子どもが会話のキャッチボールをすることでストーリーが出来上がります。子どもが幼いほどこのような大人の支援が大事になります。やがて言葉、シンボルを扱う認知能力が発達すると、子どもが一人でまとまりのあるお話を作れるようになっていきます。子どもの発達に合わせてだんだん上手に支えを外していくことも大人の大事な役割です。また、どの年代の子どもに対しても幼児教育の方法がヒントになります。幼児教育では、自発的な活動としての「遊び」を通しての指導と環境を通して行う教育を大切にしています。個々人の興味・関心を最大限に尊重し、遊びに没頭する中で、意欲や思考力、社会性を発達させること。危険でない限り、できるだけ自由に活動できるように見守り、子どもの「やりたい」を大切にすること。そして、子どもたちが環境におかれたものと出会い、そこから関心・興味をひかれることに取り組むということを通して教育がなされます。試行錯誤の過程や好奇心・探求心の発揮される過程を重視しており、放任ではなく、子どもの様子を見守りながら、適切な支援をしていくことです。子どもの創造的想像力を育むための保護者の役割は、環境づくりと適切な援助です。

ました。本事業の目的は、新潟県立大学子ども学科の学生約100名が主体となり、地域の子どもと家族向けの「観客参加型」コンサートを開催し、地域における文化芸術の発展に貢献することです。10年間で出演した学生数は延べ860人、観客総数は延べ6,105人、終演後の観客アンケート回答者は2,022人です。アンケートの内訳は、99.8%が「良かった」、100%が「今後も続けてほしい」でした。この結果から、多くの方を魅了し、地域に愛されているコンサートであると言えます。音楽のコンサートというのは瞬間芸術で、だからこそその瞬間に人々の心に深く刻まれて、人々に生きる力を与えることができ、地域や社会全体を活性化していく力になると思っています。



発見・表現・交流を体験しよう

～新潟市こども創造センターの役割～

新潟市こども創造センター サブマネージャー
田村 輝美氏

こども創造センターは2013年に文化施設として開館しました。本施設の設置目的は、「未来を担う子どもたちが、本市の豊かな自然を活かしながら、多くの人々との交流や様々な創造活動・体験活動を通して、子どもたちが本来持っている『自ら生きる力』を伸ばし、他者との違いを理解し『共に生きる力』を育むための機会と場を提供すること」です。体験事業として大きく次の4つの事業があります。

- ①あそび・ものづくり常設事業
- ②外部サポーター講師による体験講座
- ③センター職員の企画による体験講座
- ④学校・園の校外学習で利用される団体体験プログラムの学習

施設の各階に絵本や図鑑の設置がされており、子どもたちは物語を楽しむだけでなく、絵本の中の色、デザイン、言葉、読み聞かせ、ひたすらにページをめくるなど、思い思いに絵本の世界を感じ、親しんでいる様子が見えがえます。また、スタッフによる読み聞かせ劇も実施しています。



新聞社発

子どもたちの創造力を育む場づくり

新潟日報社総合プロデュース室 プロデューサー
畑川 克久氏

新聞社が取り組む子どもたちの想像力を育む事業を2つご紹介します。1つ目は「絵本ワールドinにいがた」です。2012年に新潟県立大学で初開催しました。人気絵本作家による講演会やわくわく工作&アートコーナー、県内ボランティアによる絵本読み聞かせコーナーを行いました。2015年から2022年までは、新潟日報社が主催し、新潟県立大学の特別協力、新潟県立図書館などの協力で開催しました。2つ目は「新潟県ジュニア美術展覧会」です。1961年より開催され、今年で54回目になりました。新潟県内の学校(幼稚園・保育園・こども園、小学校、中学校、特別支援学校)から出品を受け付けており、約2万3千点の応募作品の中から、専門家による審査により、約1,300点の入賞作品(特賞・優秀賞・奨励賞)が選定されます。入賞者は新聞紙面やwebサイトで紹介、表彰式も行われます。この他にも、「にいがた、びより」という新潟の子育てやお出かけ情報をお届けする新潟日報社が運営する子育て世代向けのニュースページがあります。

第2部 事例発表 「地域の子ども文化を盛り上げる」



大学と地域との連携事業

～「ファミリーコンサート」「キッズコンサート」10年の軌跡～

新潟県立大学人間生活学部 子ども学科教授
石井 玲子氏

2014年度より新潟県立大学と江南区文化会館が連携して「ファミリーコンサート」、2022年度から秋葉区文化会館と連携して「キッズコンサート」が始まり

基調講演：新潟大学大学院教育実践学研究所教授・発達心理学者	中島 伸子氏
事例発表：新潟県立大学人間生活学部教授	石井 玲子氏
新潟市こども創造センター企画運営グループサブマネージャー	田村 輝美氏
新潟日報社総合プロデュース室プロデューサー	畑川 克久氏
長岡造形大学デザイン学科准教授	平原 真氏
新潟市東区長	斉藤 淑子氏 (代理発表 澤田 紀子氏)

コーディネーター 新潟県立大学人間生活学部准教授 神谷 睦代

13:30	開会・開会あいさつ
13:35～14:25	第1部：基調講演「子どもの創造的想像力を育む」 中島 伸子氏
14:25～15:40	第2部：事例発表「地域の子どもの文化を盛り上げる」 石井 玲子氏／田村 輝美氏／畑川 克久氏／ 平原 真氏／澤田 紀子氏
15:50～16:20	ディスカッション「子どもの想像力・創造力を育む地域づくり」 進行：神谷 睦代
16:20～16:30	質疑応答
16:30	閉会あいさつ・閉会

創作活動とワークショップ

長岡造形大学デザイン学科准教授 平原 真氏



長岡造形大学の取り組みとして、こどもものづくり大学校があります。「まなび」と「あそび」の観点から、ものづくりを通して豊かな感性と創造力を育むことを目的に、小学生を対象としたワークショップです。また、私の創作活動とワークショップの事例をご紹介します。立体造形作品として発表した「Yeda」は、Y字の形の末端に磁石が入っており、磁石で勝手にくっつき偶発的な立体造形ができるという特徴のある積み木のおもちゃです。採集ワークショップで展示し、多くの作品ができました。ほかにも「Yeda Petanko」、「幽水庭」、「偏光板ワークショップ」など、数々のワークショップを開催しています。作家として心がけていることは、単にやり方をなぞるだけではなく、子どもたちが創造性を発揮できるような幅をもたせること、ワークショップの時間で終わりではなく、家に持って帰ってから自分で工夫して広げられたり、次の学びにつながったりすることをワークショップとして実施することです。

東区における子どもの文化的活動に関する取り組みなど

新潟市東区長 斉藤 淑子氏
(代理発表 東区地域課長 澤田 紀子氏)



今年度からスタートした新しい総合計画では10の重点戦略を掲げており、重点戦略⑦では「子どもと子育てにやさしいまちづくりと新潟の未来を担う人材の育成」を掲げ、社会全体で子どもと子育てを支える取り組みを重点的に行っていきます。東区における子どもや文化に関する事業についてご紹介します。産業のまち東区「オープンファクトリー」では工場見学やものづくり体験を実施しました。東区歴史文化プロジェクトでは区内中学校体育祭応援パネル・美術部作品展示の実施や新潟県立大学人間生活学部子ども学科の学生さんが作製したオーナメントをクリスマスツリーに飾り付けて東区役所に設置しました。ゆめ・のせ・あがれ寺山こい来いフェスタでは区民の皆様とともにこいのぼりの掲揚や地域コミュニティ協議会、東区自治協議会、小中学校などを中心とする実行委員会による各種イベントを実施しました。東区は「い〜てらす」「こども創作活動館」「わいわいひろば」など子育て施設が充実しており、東区2km子育てトライアングル魅力発信では、東区子ども文化祭、子ども祭りなどを開催しました。

参加者の声(一部)

- 様々な観点から芸術・文化活動について知ることができて、新潟には色々な資源があることが分かり、たくさんの子どもたちに活用してほしいと思った。
- 子ども創造性を育むために大切にしたいことを改めて自分の中で考える良いきっかけになりました。
- 未来の子ども達のため、同じ方向をみながらいろいろな立場の連携で長期的な取り組みが必要であることを学びました。
- 芸術、音楽、絵本等どれもこれも興味があり、とてもワクワクさせていただきました。

メディア等

本公開講座は、新潟市東区の区だよりに掲載されました(2月4日号)。

ディスカッション 「子どもの想像力・創造力を育む地域づくり」



進行 神谷 「地域における子どもの文化を拓くという視点で、それぞれの立場からこれからの課題について伺いたい。」

石井 「ファミリーコンサートなども予算がないと実施できないこと。芸術に対する理解が行政や企業にあってほしい。学生たちも本当に子どもたちに伝えたいという熱い思いで行っている活動なので、継続的に実施できるような支えをいただけるといい。」

畑川 「新聞社にも潤沢な予算があるわけではない。いろいろな方と連携してものごとを作っていくときに、企業様含めて事業の趣旨に賛同していただける方を集める役割がある。子どもは地域の宝。子ども時代にいろいろな体験をすることで子どもの人生が変わってくるのではないかな。そのような機会をつくるのが新聞社の役割なのかなと思う。」

田村 「また来たいと思っていただける環境整備が課題。例えば木のおもちゃを通じておもちゃ、木、自然に触れてもらう。用具の点検など経年劣化も悩ましいことで、行政さんと相談しながら進めている。工作の材料の補充で新潟日報社さんから新聞を頂いている。想像を膨らませる仕掛けあそびなどもブラッシュアップしていかなければと思っている。」

平原 「表現したいことは一つ。どんな方法をとるかに関してはその都度一番いい方法を選択している。違う視点を持つためにいろいろな領域を横断することが創作の立場からも重要であり、ほかのことにも応用できることだと思う。」

澤田 「大人が子どもの相手ができる社会づくり。大人に心の余裕がないとなかなかそういう時間が作れないので、そこが行政の仕事なのかと思う。予算については、少子高齢化などで厳しくなってきたが、継続が大切ということで、東区においても検討していきたいと思う。」

総括 中島 「地域の中に、子どもたちにとってのイメージの世界を作っていく様々な活動や場という資源がたくさんあると感じた。課題について伺い、予算、連携、クロスオーバーが大切。そのためには意義をわかりやすく伝えていくことが重要。大事なポイントは二つあって、一つは学校や園ではできないこと等、どのようなことをしているのかをアピールしていくこと。もう一つは学校や園と地域がつながってより豊かな保育や教育にしていくこと。そのためには、学校や園のクラスの子どもたちが一緒に体験をしに行き、活動を共有することが大切になると感じた。」

進行 神谷 「このディスカッションでは、お互いに情報を共有できるとともに、それぞれの取り組みについて連携するという可能性も見出すことができた。この度の公開講座が、子どもの文化を拓く、また、子どもの想像力・創造力を育む地域づくりの起点となることを願いたい。」

教員プロフィール

山中 知彦 教授

【所属】国際経済学部
【専門分野】地域デザイン
【担当科目】地域デザイン
論Ⅰ・Ⅱなど



教員プロフィール

天龍 洋平 准教授

【所属】国際経済学部
【専門分野】経済成長論/
所有権理論/微分ゲーム理論
【担当科目】経済政策Ⅰ・Ⅱなど



山中 知彦教授と 天龍 洋平准教授の活動紹介

2023年10月27・28日の二日間に延べ2,500人が訪れた第1回新潟市東区オープンファクトリーは、人口減少下の求人支援という当初の目的を超え、企業間連携によるものづくりの現場の魅力を発信した。年度初めに、東区役所の公募に応じた区内11企業の代表による実行委員会が組織され、全国きっての卒業アルバム制作工場・博進堂の清水社長が会長、本学から天龍准教授が副会長、山中教授が委員として参加した。東区地域課が事務局を担った月一回の実行委員会で、熱心かつ入念な準備が進められた結果が実を結んだ。また、2022～2023年度にわたり、本学と新潟大学の授業が連携し、多くの大学生が企業サポーターとして地域産業に直に触れた教育的効果も大きかった。

オープンファクトリー
(博進堂)



新潟市東区の産業教育観光政策に係る産官学連携プロジェクトの継承

ことの発端は12年前に遡る。山中教授が担当した都市・地域デザイン演習で、通船川沿川のまちづくり提案に取り組んだ学生の一人が、船上から工場や街の夜景を楽しむツアーを提案した。最終成果発表会で講評・採点に参加した住民活動家がこの提案をいたく気に入り、木戸コミュニティ協議会で予算化するのでアイデアを実現させてほしいと申し出てくれた。翌年、定員をはるかに超える参加申し込みの下、学生たちがガイドを務める工場夜景バスツアーが実施され、その後、東区役所が実施主体を受け継ぎ、現在まで人気のイベントとして続いている。

東区役所は特色ある区づくりプランとして、この十数年様々な産業観光プロジェクトに取り組み、山中教授も自治協議会会長職などを通じて関わってきた。ところがCOVID-19により、2020年にはほとんどすべてのプロジェクトが休止に追い込まれた。

そんな中、2021年1月に本学は新潟市との共催で公開講座「新潟市東区産業観光の広域展開に向けてーポストコロナ時代のグローバル戦略を探るー」(センターニュースvol.4参照)を開催した。東区長と産業界の6名のパネリストの発表とディスカッションを行い、参加者全員が東区内の企業を主体とする産

業観光の新たな展開に向け、産官学連携で今後の具体的なプログラムの展開を目指すことを確認した。

公開講座の終了後にパネリストの一人、博進堂の清水社長の発議を受けた東区役所は、2022年度にNIIGATA産業教育観光デザイン会議を発足させた。公開講座のコーディネーターを務めた山中教授と経済政策を専門とする天龍准教授が委員として参加し、翌年に新潟市東区オープンファクトリーを開催することを決めたのだった。(文責:山中)

伊藤 巨志教授の活動紹介

遊びの中で運動を身につける「遊育(ゆういく)」を推奨して、子どもや保護者、教員、保育者への講演や研修活動を積極的に行っています。BSNキッズプロジェクト「SDGs de はぐむコラム」において、2019年4月から執筆を開始しました。このコラムと連動してBSNラジオ「立石勇生SUNNY SIDE」に出演中です。子どもの遊び、運動・スポーツと発育発達についてお話ししています。



教員プロフィール

伊藤 巨志 教授

【所属】人間生活学部子ども学科
(大学院健康栄養学研究科)
【専門分野】体育学、身体発育発達学
【担当科目】健康科学特論(大学院健康栄養学研究科)、子どもと健康、運動技能、保育内容(健康)など



「遊育(ゆういく)」推進のための親子運動遊びワークショップ

BSNキッズプロジェクトと新潟市東区寺山公園交流施設「い〜てらす」の全面協力の下、12月2日に5歳以上の未就学幼児17組、12月9日に小学校低学年7組の親子の参加によるワークショップを実施しました。BSNキャラクター「ハレッタ」との写真撮影や触れ合いタイムを行った後にワークショップを実施したこともあり、柔らかな雰囲気から和気藹々と進みました。



ハレッタとの記念写真

「モノや道具を使わない遊び」として、片足立ちでバランスを取ったり、腕支持運動(はいはい、熊歩き(高這い)、カエル跳び、兎跳びなど)、両足・片足ジャンプをしたりすることで、身体の調整力を養う基本運動を親子で実践しました。「はいはい」は子どもの方が大人よりも上手にできる事を観察することで、大人自身が忘れていた感覚を確認することができたのではないかと考えています。

「モノや道具を使う遊び」(家庭や100均で買える身近なものを使って)は、新聞紙を振ったり回したりして新聞紙の動きを身体で表現する遊びや、ジャンケンをして負けたら半分に折る事を繰り返し新聞紙の上でバランスをとったり、新聞紙を丸めて親子でキャッチボールをしたりなどバランスや投げ動作を行いました。小学校低学年の参加者には紙鉄砲を作成して、大きな音を出すための動作を練習することで

熊歩き(高這い)



風船を手でコントロール

ボール投げに役立つことを実践しました。また、風船を手や脚、頭で落とさないようにコントロールしたり、親子で対決したりして風船のフワフワ感を楽しみました。養生テープを風船に巻くだけで反発力が強くなり高度な遊びへと進化することを経験しました。ちょっとした工夫で遊びが高度化する事の実践を通して、身体の発育と発達を助長することを願っています。